

平成 27 年 4 月 24 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

内ノ籠断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、内ノ籠（うちのこもり）断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 内ノ籠断層の特性

項目	特性	信頼度 (注 1)	根拠 (注 2)
1. 断層帯の位置・形態			
(1) 構成する断層	内ノ籠（うちのこもり）断層		文献 1
(2) 断層帯の位置・形状	断層帯の位置		文献 1、4 及び地形の特徴から推定
	(北端) 北緯 36° 41.9′ 東経 139° 31.1′	△	
	(南端) 北緯 36° 36.3′ 東経 139° 27.2′	△	
	地表の断層の長さ 約 12km 一般走向 N30° E	△ △	
(3) ずれの向きの種類	右横ずれを主体とする断層 西側隆起の逆断層成分を含む	○	文献 1、4 及び地形の特徴から推定
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	西傾斜 70° 程度	△	文献 1
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約 0 km	○	地形の特徴から推定。 地震発生層の下限 下端の深さと傾斜から推定
	下端の深さ 10km 程度	△	
	断層面の幅 10-15km 程度	△	
(3) 断層面の長さ	不明		

3. 過去の断層活動			
(1) 平均的なずれの速度	不明		文献1では活動度B-C級
(2) 過去の活動時期	不明		
(3) 1回のずれ量	1 m程度 (全体)	△	断層の長さから推定 (注3)
(4) 平均活動間隔	不明		(注4)
(5) 過去の活動区間	全体で1区間	○	
4. 活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模	マグニチュード6.6程度	△	断層の長さから推定 (注5)
5. 地震後経過率			
(1) 地震後経過率 (注6)	不明		

注1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い

注2：参考文献

文献1：活断層研究会編（1991）：「[新編]日本の活断層—分布図と資料—」．東京大学出版会，437p.

文献2：松田時彦（1975）：活断層から発生する地震の規模と周期について．地震第2輯，28，269-283.

文献3：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，55，795-855.

文献4：中田高・今泉俊文編（2002）：「活断層詳細デジタルマップ」．東京大学出版会，DVD-ROM 2枚・付図1葉・60p.

注3：経験式（文献3）によれば、1回の活動に伴う変位量D（m）は、断層の長さL（km）を用いて、 $D=0.1L$ と表される。

注4：活動度をB級として平均的なずれの速度を0.5m/千年とすると、1回の変位量から、平均活動間隔は2万4千年程度となる。

注5：経験式（文献2）によれば、活動時の地震規模M（マグニチュード）は、断層の長さL（km）を用いて、 $M=(\log L+2.9)/0.6$ と表される。

注6：最新活動（地震活動）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。ただし、内ノ籠断層について地震後経過率は不明である。